

最終年次の実践・研究の成果と課題

研究委員長 鎌田 雅子

研究主題である「自律した学習者を育てる」、そして研究副題である「学びをつなぎ資質・能力を高める」の実現を図るため、平成30年度より3年計画で各教科等を窓口とした授業研究に取り組んできた。昨年度、コロナ禍における休校措置、分散登校、感染症対策による学校生活の制約を余儀なくされ、学習活動においても感染症対策を優先することで、例年のように研究を進めることができなかった。道半ばとなってしまうことを避けるため昨年度を研究の充実期と捉え、今年度をこの研究の最終年次として研究に取り組んだ。

研究1年次

重点1 子どもたちが学びのつながりを自覚できる単元・題材構成の工夫

重点2 「見方・考え方」を働かせた学習活動の設定

成果

- ① これからの学びを見通す力を高める単元・題材構成のポイントの明確化
 - ・明確で具体的な目標を知ることができる（どこに向かうのか）
 - ・目標に対する自分の学びの現在位置を知ることができる（進み具合はどうか）
 - ・次の段階や新たな目標を知ることができる（次に何をすべきか）
- ② 課題解決に必要な「見方・考え方」を働かせる力を高める学習活動の明確化
 - ・「見方・考え方」を知る
 - ・教師と使ってみる
 - ・仲間と使ってみる
 - ・一人で使ってみる

研究2年次

重点1 自らの学びをつなぐ効果的な省察の工夫

重点2 課題解決に向け、適切な「見方・考え方」を自覚的に働かせる力を高める単元・題材構成の工夫

成果

- ① 学びの深まりにつながる効果的な省察のバリエーションの明確化
 - ・学習活動における「小さな省察」
 - ・1単位時間における「立ち止まる省察」
 - ・単元・題材における「変容を自覚する」省察
- ② 自覚的に「見方・考え方」を働かせるための単元・題材づくりの在り方
 - ・思考・判断・表現と省察の往還を繰り返し、積み重ねる活動の設定
 - ・立ち返り、つなげるための支援
 - ・パフォーマンス課題の設定

（2年次までの成果については「令和3年度の実践研究について」を参照）

研究3年次・最終年次

子ども自身が選択・決定し、1単位時間の中で、また単元の中で何度も省察を通して見直し、修正しながら追究する必要の生じる単元・題材構成の在り方の具現化を目指し、以下の二つの重点を設定した。

- 重点1 自ら選択・決定する学習活動を位置付けた単元・題材構成の工夫
 重点2 自らの学びをつなぐ効果的な省察の工夫

I 実践を総括した研究の成果と課題

1 成果

○各教科等における『「自律した学習者」を育てる学習のプロセス』の明確化

自律的に学ぶ力を育てる単元構成のイメージを各教科等において明確化し（図1）、教師間で共有した。「選ぶ」「やってみる」「省察」「選び直す」活動の各教科等の具体を明確にして授業を積み重ねたことにより、教科等ならではの「学び方」として子どもが自覚的に用いる姿が見られた。例えば、教材・題材との出会いの場で疑問や気付きを出し合

う場面、問題解決方法を見通す場面において、これまでの学習と意識的につなぐ姿が顕著に見られた。「どのように学ぶか」選択・決定する場を単元に位置付け、その方法を省察することは、選んだ学び方の有効性を実感し、自らの学びに活かす意識を高める上で有効である。

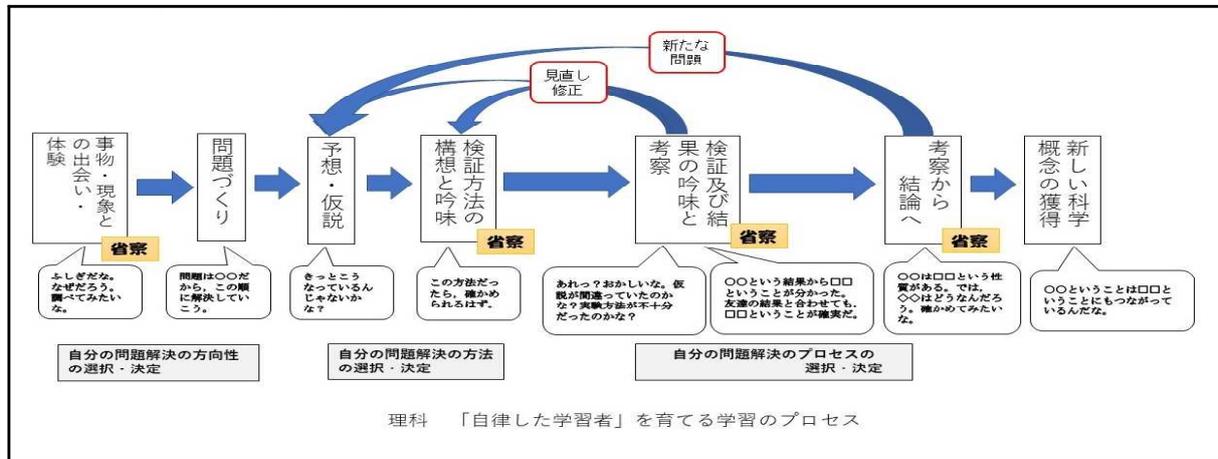


図1 【「自律した学習者」を育てる学習のプロセスのイメージ（理科）】

○選択・決定と省察の関係性の明確化

自らの選択・決定が適切だったのか協働の学びを通して省察し、協働で見いだした学びを再度見つめて個々に選択・決定する行為自体が省察の場になるというように、学びの中で選択・決定と省察は往還しながら行われることが分かった。そして、個と協働の省察を繰り返すことによって学びは深まっていく。「僕たちが設定したゴールに近づくためにあと何が必要なんだろう」「どの考えも間違いではないと分かったけれど、この時間に見つけた新たな考えは何だろう」「つまりここまでの話合いから見えたこととは」と学びが進むにつれて協働の「問い」を次第に焦点化していく姿は、選択・決定と省察、個と協働の学びの場が繰り返し設定された授業で見ることができた。

2 課題

○選択・決定を支える「見方・考え方」を明確にした授業づくり

子ども自身が選択・決定しながら学習を進めることは、学習の主体が自らにあることを自覚し、学びの主体性を高める。選択・決定の場を学習過程に位置付けることで、自身の選択・決定の根拠を示しながら考えを述べる姿は見られるようになってきた。しかし、選択・決定を吟味する場において教科等ならではの「見方・考え方」を適切に働かせることができずに学びが深まりきらないことが共通の課題として見えてきた。学びのゴールを子どもと教師で共有した上で学習を進められるようになってきた一方で、児童の実態把握に基づく、設定したゴールに向かう過程に必要な条件や方法（学習方略）や必要な活動を教師が適切に見抜くことができていないことが原因として考えられる。単元開始時の実態を踏まえ、子ども自身が学びの現在地を適切に捉えることができる力を高めるための手立てを明らかにする必要がある。

II 今後の方向性

各教科等における「自律した学習者」がどのようなものであるか明らかになってきた。そして、自律的に学ぶ子どもを育てる授業には、子ども自身が学びのプロセスや方法を選択・決定し、1単位時間の中で、また単元の中で何度も省察を通して見直し、修正しながら追究していく過程を位置付ける必要があることが分かった。修正するためには、自分の設定したゴールに現在の自分を照らしたとき、自分の学びがどこまで到達しているのか見極めなければならない。子ども自身が適切な場面で立ち止まり、自己の学びを見つめる「ものさし」をどのように捉えていけばよいのか明らかにしていく。また、児童の実態と教科等に応じた思考過程を踏まえ、立ち止まり吟味すべき場面を見抜く教師の力も高めていかなければならない。子どもがどのような問いをもち、どのような考えを見いだしながら学びを進めていくのか、何に気付き立ち止まることができれば学びが深まるのか、教材・題材の価値と子どもの思考過程を関係付けて授業づくりをすることで、教師がコーディネートすべき場面を探っていく。